

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

井上, 美香子

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻(日本近・現代大学史) : 博士課程

新谷, 恭明

九州大学大学院人間環境学研究院(日本教育史 : 学校文化史)

<https://doi.org/10.15017/1904676>

出版情報 : 教育基礎学研究. 5, pp.1-20, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

井上 美香子 ・ 新谷 恭明

0. はじめに

現在では修学旅行は学校教育においては欠かせない行事のひとつであるが、その内容、性格もスキー教室であったり、海外観光であったり、多様化している。周知のように、修学旅行というものが日本の学校教育の中に位置づけられたのは高等師範学校において明治20（1887）年3月に修学旅行に関する規程を定めたところから始まる¹。そして修学旅行は明治21年8月に師範学校設備準則の但書に書き込まれることでいわゆる「法的規定」²がなされたとも言われる。しかし、これは「法的規定」というより「準則」に書き込んだことで文部省が師範学校における修学旅行を容認し、制限をつけたということであろう。少なくともこの時点から修学旅行は師範学校の教育の一部として位置付いたことはまちがいない。

一方、実態としての修学旅行は文部省が軍隊的な管理を師範学校に押しつけてきたことに対して東京師範学校の高嶺秀夫が抵抗したことから学術研究の要素を採り入れたことに始まるというのが定説である³。修学旅行史研究にとってはこの事実が大きな意味をもつ。つまり、修学旅行の定義にかかわるからだ。修学旅行が成立したところにおいて既に文部省と高嶺の間の教育観の対立があったわけであり、旅行という非日常的な時空間を教育の一部として取り込むこと自体が「問題」として登場し、以後もこの「問題」が批判に晒されつつ学校教育の中に普及していったのだと考えることができる。修学旅行の実態とはそういう意味で検討し直されなければならないものなのである。だからこそ修学旅行は全国の師範学校はもとより、その趣旨をそれぞれの学校種ごとの事情と重ね合わせる中で普及していったのである⁴。

本稿では修学旅行が理念的に成立する過程から、普及していく道筋を見出す過程において修学旅行に対して与えられた「問題」、すなわち修学旅行の定義と再定義を検証することを目的とする。

まずは高嶺が学術研究の要素を採り入れたということの意味を検証することによって行軍旅行が修学旅行となった理念的根拠を見直し、修学旅行が文部省に容認されていく明治21年8月までに高等師範学校で修学旅行が実施される実態をみている。次いで文部

省が修学旅行という学校行事を認めた後に修学旅行の再定義が行われていく過程をみてることにする。ここから修学旅行は世論の批判の眼に晒される。既に知られるように修学旅行に「本来」の意味はない。あるとすれば森有礼と高嶺秀夫の教育観の相違である。その教育観の揺れが修学旅行のありように与えていった影響を検討してみるのが本稿の目的である。修学旅行が成立し、普及する過程を正確に押さえておくことで、修学旅行史を学校文化史、教育慣行史に位置づけていく基礎作業としたい。

1. 行軍から修学旅行へ

森有礼の教員養成論において「三気質」が求められ、師範学校を軍隊化する方策がとられ、その一つが行軍であったことはよく知られる⁵。行軍が修学旅行へと読み替えられた経緯は以下の通りである。

周知のように修学旅行の先駆とされているものは明治19（1885）年2月15日から26日にかけて実施された東京師範学校の長途遠足である⁶。この長途遠足に際し、教諭数名が同行していた。『教育時論』の記事によれば「是は行軍の傍実地に就きて学術上の現像を探求し又は之を説明して生徒にも其裨益を与へんとの主意」であるとし、「後藤牧太君には地質学其他理学上の探求を為され三宅米吉君は貝塚其他史学上の吟味を遂げられ小山正太郎君は其得意の鉛筆を以て地勢景色を描写せらるる事なるべく大村芳樹君八傍近の小学校を巡覽せられて教育上の参考を為す…」と同行した個々の教員の研究内容が紹介され、「是等の利益は却て単に行軍によりて生ずる利益よりも多かるべし」と生徒ではなく教諭側の学術研究の成果に言及されていた⁷。

この長途行軍の後、東京師範学校は高等師範学校と改組・改称し、陸軍省陸軍歩兵大佐山川浩が校長として着任した。東京師範学校の校長職にあった高嶺秀夫は教頭に就任することになった⁸。もとより高嶺は「惟ふに、兵式訓練を学校に適用することは必ずしも不可なしといへども、或は極端に走りて其の弊を受くることなきを保せず⁹」と森の軍隊的教育策に批判的であったことが示唆されており、「例へば、本校生徒をして兵士と同一の行軍をなさしむるが如きは、本校の趣旨・目的に適せざるものありしかば、先生は熟議の上、行軍に学術研究の為にする旅行を兼ねしむる案を立て、十九年二月、自今毎年一回生徒をして長途修学旅行をなさしむるの件を稟議し、乃ち其の允許を得たり¹⁰」と学術研究を本旨とする修学旅行構想を提示したという。この考えに基づいて明治19年2月の東京師範学校における長途遠足及び同年8月の高等師範学校における下野への行軍が実施された¹¹。

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

まず、下野への行軍は「上野横川より信劬軽井沢甲劬甲府等を経て帰校するの見込にて日数二十余日間の予定なりしが信州追分地方は流行病ありとの報ありたれば俄に方向を転じて野劬鹽原地方へ出発せり」¹² というふうに急遽変更されたもので出発も一日遅れて8月19日に上野を出ている。宇都宮で下車して行軍に入った。目的地は下鹽原（那須塩原市）であり、白沢街道、奥州街道を徒歩で移動し、22日に下鹽原に到着している。この間、21日には「数日の行軍ゆへ生徒中四名の疲労者を生じたり」¹³ という記述からかなりハードな行軍であったことがわかる。

下鹽原において29日まで滞在し、兵式体操演習を3日、学術研究を4日行っている。24日の兵式体操演習は午前6時に始まり午前中は発火演習、午後には対抗運動を行い、「其運動頗る激烈にして半途脱隊せるもの兩三名ありし来看者如山何れも其活潑に驚かざる八なし」¹⁴ と途中で脱落する者が出るほどの演習の激しさを伝えている。また、26日は午前3時に非常喇叭で生徒を叩き起こし、対抗演習を行った。会津に本陣を置く北軍が宇都宮を占領し、東京に進入しようというのを南軍が防衛するという想定のものであり、午前6時までの3時間弱にわたるものであった。

学術研究はたとえば23日には中学師範一級前期生と二級後期生は温泉場を巡覧して温泉成分の分析を行い、三級後期生実地写景を、三級前期生と理科生¹⁵ は「山谷を跋涉し種種の研究を為し」¹⁶ ということだった。

30日に一行は下鹽原を出発し、9月2日に日光に到着する。日光で2泊した後、三組に分かれ、中禅寺、湯本、足尾銅山にそれぞれ学術研究と称して鉱泉試験、動植物採集などを行い、再び6日に日光に戻ってくる。そこから宇都宮に行軍の後、汽車で帰るという行程であった¹⁷。基本的に目的地を鹽原と日光に定め、行った先で集中的に学術研究と兵式体操演習を行うという形をとっていた。

この行軍旅行について、『東京茗溪会雑誌』にはこれを「修学旅行」と位置づける文章が掲載されている¹⁸。この文中では校外での学術研究（観察、採集等）や身体の鍛錬について言及してはいるものの、夏期休暇において「都会ノ中ニ滞留シ飲食起居ノ度ヲ正フセズ不規律ノ習慣ヲ得其身心ヲ柔弱ニシ以テ再ビ校舎ニ帰ル者無キヲ保ス可ラズ」と夏休みの弊害に触れたところで、「今ヤ修学ノ旅行タル教官ノ之ヲ牽ルアリ節度宜ク失ハズ」とし、「宿泊ヲ共ニシ飲食ヲ同フシ苦楽一軌其親愛ノ情ヲ加フルモ亦惟平常校舎ニアリテ教授ヲ受クルノミノ比ニ非ズ薰陶ノ及ブ所亦浅少ナラザルヲ知ルベシ」と「修学ノ旅行」の教育効果を今でいう生活指導的観点から評価している。行軍の移動は概ね早朝に出立し、午前中には目的地に到達している。そうしたスケジュールを見てい

けば教官と生徒が語り合う時間はずいぶんあったと思われるし、そのことが大きな教育効果として総括されたのである。

そうして明治20年3月に高等師範学校において以下のような修学旅行に関する規程が定められている¹⁹。

- | | | |
|----|------------------|-----------|
| 第一 | 七月十六日より九月十日までの中 | 三十日以上 |
| 第二 | 十二月二十日より同三十日までの中 | } 時宜により執行 |
| 第三 | 三月十五日より同三十日までの中 | |
| 第四 | 毎月一回 土曜日 一泊以下 | |

この規程の「第一」に基づいて実施されたのが明治20年8月から9月にかけてのほぼ一箇月間にわたる旅行であり、初めて修学旅行の名を冠したものの誕生であったが、その子細についてはすでに紹介しているのでそちらを参照されたい²⁰。

この最初の修学旅行の後、高等師範学校では行軍の例規を定めている。「高等師範学校に於ては、生徒の一泊以上の行軍は、夏冬両季休業中、及び春期試験の後に限り、これは学術研究旁々することとして、兵式操練の用具を携帯せしめず、常時臨時に於てするものは総て一泊がけ若くは一日往復と定めて、兵式教師の引率に任ずの成規と、去年(明治20年 - 筆者注)の末に決定せり²¹」という記述があり、高等師範学校内では兵式教師の引率する行軍と学術研究の徒歩旅行とは区分されるようになったのである。

2. 修学旅行の容認、定着と批判

明治21年3月、前述の例規に従い、高等師範学校では房総への行軍(修学旅行)を行っていることが『教育時論』の記事にみえる²²。ここでは「過日来同生徒の一隊が、千葉県下を旅行したる話を聞くに、去月十六日午頃千葉町に着し、小学校を觀るの予定なりしも、試験後の休業なりしを以て、千葉尋常師範学校を參觀したりと」と記され、師範学校の状況が評価も交えてつづさに述べられ、さらに尋常中学校、木更津尋常小学校、同所高等小学校、天津小学校の視察記録が紹介されている。兵式操練のことは全く記されておらず、学術研究に特化した旅行であったことが推察できる。

さらに同年7月20日、高等師範学校では二度目の夏の修学旅行を実施した。これに参加した博物学科の平澤金之助の日記²³によれば「本回の旅行は理化学科担任の諸教官は何れも用事ありて赴かず去れば該科の生徒も旅行中識見を得るの便なきにより只有志の輩のみ同行すべき事となりければ該科乃生徒は大いに望みを失ふ也」ということで「修学旅行の一行に加はりたるは只一人のみなりき」ということであり、後は「博物学科文

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

学科及少数の中学師範学科生徒のみ」であった。また、同行する「教官は多くは博物科担当の人なれば課業最も多くして其勞最も大なるは又博物科生徒なるべし」ということで、博物学科を中心とした旅行となった。

問題はこの旅行の目的である。「今回は生徒の扮装全く従来と異なりて専ら修学の目的を遂げしめんかため銃創等を携帯せず唯旅中に必用なる襪衣靴下及び他の必需品を運搬する為め背囊を担ひたるのみ」と、前述の例規に従い、行軍・兵式体操という目的は除かれ、修学に限定されたことである。そのため装備も通常の徒歩旅行のスタイルをとった。

この目的の変更は「軍隊式教育の導入」²⁴をはかる文部省にとっては当初のねらいとは趣旨が異なるものとなってしまった。そのせいかどうかはわからないが、この旅行から文部省の協力は得られなくなったのである。すなわち、「従来我校生徒の旅行は留ときは文部省より予じめ其地方に諭達して不都合なき様乃図らへとなせしも斯くては地方の官吏及戸長教員等乃待遇頗る優渥に過くる乃恐ありしを以て今回は毫も予達なかりし去れば宿泊休憩所等乃設けも之を従来に比するときは聊さか其便を欠きたる所も少なからず」²⁵といっさいの協力は得られなかった。当然「今回旅行の目的は主として修学の一点にあるを以て途上或は各科分行するをあるべきものとすされば生徒を部署するの法を従来の如く古参生徒にのみ委任せずして各科各上席生徒二名を撰んで部長及部長補となし以て其科の生徒を部署せしむ」²⁶と組織も軍隊式をとらなかった。

一行は当時高崎まで開通していた鉄路を利用し、高崎から先は徒歩で長岡に向かう。途中で水路も使い、長岡から三条に行き、若松街道を会津に向かって進む。そして会津若松で磐梯山の实地検分をするのである。周知のように磐梯山は明治21年7月15日に大爆発による山体崩壊を起こしており、この旅行はまさにタイムリーな企画であった。磐梯山の精細な实地検分の後郡山を経て一行は那須塩原に到達する。ここで数日滞在して那須駅より汽車で帰京するという行程であった。

この旅行において行軍色は一掃され、目的は修学に絞られた。修学であるから交通機関の発達に伴って徒歩旅行という側面が減っていくのは当然のこととなるであろう。これについては日本鉄道の延伸歴をみれば明治19年8月の下野行軍の時は日本鉄道は東北方面へは上野から宇都宮まで開通しており（大宮-宇都宮間の開業は明治18年7月）、明治20年8月の第1回修学旅行の時も上信越方面は高崎までの営業であった。明治21年7月の磐梯山をめざした旅行では行きは終点前橋まで汽車で行き、帰途も前年10月に延伸・新設した那須駅から東京に向かっている。

このように高等師範学校で始まった修学旅行は当初から交通機関に依拠しており、交通手段の延伸にともない、それを確実に利用していくという指向性が明確に出ているのである。行軍に始まった修学旅行であったが、修学旅行を指向した段階で移動手段は旅行の目的から外れたことを意味している。つまり、交通機関がないからたまたま徒歩なのであって、徒歩であっても行軍ではないということだ。

それと同時に、この修学旅行の教育的意味性は文部省も認めざるを得ないことになり、明治21年8月21日、尋常師範学校設備準則別冊に「修学旅行八定期ノ仕業中ニ於テ一年六十日以内トシ可成生徒常食費以外ノ費用ヲ要セサルノ方法ニ依リテ之ヲ施行スヘシ」という項目が書き加えられた。これは修学旅行という高等師範学校発信の名称を採用したことで師範学校で実施されている修学旅行の実態を容認したものであり、日数と費用を書き込むことで内容に制限を加えたものとみてよい。

斯くして修学旅行は教育のひとつの手法として定着したが、その一方で修学旅行についての教育界の批判的まなざしも登場してくることになる。明治22年8月の『教育時論』はその社説に「修学旅行」と題する一文を掲げ、高等師範学校、尋常師範学校の修学旅行のあり方を批判している²⁷。その概要を紹介しよう。社説は「抑此修学旅行は、明治十九年高等師範学校生徒が行軍と称し、軍装して数週間旅行したるを始とし（中略）其後如何なる都合にや、行軍の名を改めて、修学旅行とは為したれど、其実際に於ては、敢て前日と異なること無し、去れば此旅行は、修学と称するも純粹の修学にあらず、兵式体操の気質訓練を兼ねたる、一種変体の旅行と見て差支なかるべきか」とその目的の二重性とあいまいさを指摘して、「一種変体の旅行」とみなした。

そして、「一ト度之を聞くときは、両様の目的ありて誠に有益の旅行の如しと雖、今茲に師範生徒が兵式訓練の為に旅行するも無益なり、修学の為に旅行するも無益なり、と云ふ道理の明白となりたらば如何、此一種変体の旅行者は、遂に其跡を絶つの外かなるべし」とこの目的の二重性を批判した。つまり、この当時流行していた修学旅行が学術研究と行軍の二つの目的を持つようだが、いずれにおいても中途半端であり、「無益」にならざるを得ないと批判したのである。この批判は当時の修学旅行がその二つの目的のあいだで揺れていたことを示している。

具体的には、「抑学生が修学の為めに旅行するは、如何なる目的にして、如何なる準備を要するぞ」と問いかけ、「教師の講義のみにて実験せざれば、疑団を解く能はず、去れど到底学校に在りて、之を実験するの機会なしと。此の如き場合に在りては、実地観察の為め必ず旅行せざるを得ず」として「修学旅行には、先づ己れが専攻する所の学

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

科につき、平生研究して未だ発する能はざるの疑団なかるべからず」と専門の研究上の疑問が必要であるとする。

そして師範学校の場合の修学とは何かについて問い、「師範生徒の専らとする所は、心理学教育学等にして、此等の学科は、寧一室に籠りて深思熟慮するか、否らざれば多数の児童と伍を為して、其性情の趣く所を觀察すべきものなり。其他の実験学に至りては、何れも普通の学科にして、修学旅行の必要は敢て無かるべし」とその無用を説いている。高等師範学校については「其程度も稍高尚にして」といくぶんの必要性は認めるものの、「文学を専修する生徒には、無用のものと云はざるを得ず」ときびしい判断をしている。ついには「殆んど弥次と喜太とが、東海道を旅行したると格別の相異なく、さまで学問上に裨益する所なかるべし（中略）逆も其得る所を以て、其費す所を償ふに足らずと云べし」と経済効率的にも無駄だと断定している。

実際、師範生徒の旅行中の研究（温泉場における鉱泉の分析、古戦場における勝敗の談話、巨刹伽藍を詣でての建築の説明など）をあげつらい、「如何せん普通学を修むる師範生徒の為には、何程教師が精密に説明したりとて、さまで其甲斐あること無かるべし」とそれらの「研究」が所詮取って付けたものに過ぎず、修学旅行の目的が定まっていないう現状を具体的且つ痛烈に批判している。そのように目的が学術研究とも行軍とも定まっていないう修学旅行はただただ「近来流行の一事」とみなさざるを得ないとしていたのである。

この社説に対して賛同する意見も『教育時論』には寄せられた。この投稿者も「修学旅行ノ流行スル今日ニ於テ、其熱ヲ冷スハ、甚タ困難ノ如ク感スレトモ、時運既ニ来レリ、修学旅行ノ命脈決シテ永キニアラサルベシ」²⁸と修学旅行は一時の流行とみなしていたが、なかなか熱は冷めないうと見られていた。

一方、文部省はこの年の年報において「其新設ノ事業中益々其効果ヲ現スモノアリ曰ク兵式体操ナリ修学旅行ナリ農業及ヒ手工科ノ実修ナリ女子裁縫科及ヒ家事経済ノ更張ナリ」²⁹と尋常師範学校の修学旅行については兵式体操と区分してあげた上で高く評価していたし、現実には流行ではなく修学旅行は確実に定着し、普及していったのであった。

3. 物見遊山型修学旅行へ

明治25年7月11日、「尋常師範学校ノ学科及其程度」が改正されたが、その説明文中に修学旅行について「夏季休業及学期末休業等成ルヘク適当ノ時期ヲ撰ヒ教員ヲシテ生

徒ヲ率テ修学旅行ヲナサシメ山川郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛錬スルト共ニ知見ヲ広メシメンコトヲ務ムヘシ」と書き込まれ、積極的に修学旅行を行うよう促している。この説明文では修学旅行から学術研究の文言は消え、心身の鍛錬と知見を広めることに目的は微妙に修正されている。しかし、前述のようにその目的は相変わらず「鍛錬」と「知見」のあいだを揺れていた。その揺れがある意味では修学旅行の宿命であったのだろうし、修学旅行の本質でもあったと考えられる。

先に示したように当初の修学旅行は行軍に始まったが、趣旨の変化により行軍色はうすれ、学術研究を重んじるようになった。行軍にこだわらなければ、移動に際しより至便な交通機関を使うのは当然である。

明治28年7月21日から8月12日の行程で長野県尋常師範学校では関西方面へ修学旅行を行っている。長野から汽車に乗って出発するが、屋代から先は徒歩となる。中山道に入って伏見まで徒歩。伏見からは川下りで笠松に行き、岐阜に着く。岐阜から米原へは再び汽車に乗り、京都に入る。京都、奈良を一週間ほど観光した後、伊賀上野を経て上柘植から汽車で伊勢に行く。伊勢神宮を参詣して、神社港より船で名古屋方面と東京方面に別れて移動する。名古屋から飯田まで徒歩で行き、そこで解散するという行程であった。この時の旅行記³⁰には見聞したことが、細密に記録されている。例えば7月25日は終日徒歩で移動している。須原宿から妻籠を経て中津川までの10里の行程であり、暴風雨であったという。まず午前5時に須原を出発。定勝寺を見学。その梵鐘にまつわる話などが記されている。次いで通過した長野、今井などの土地の伝承が記載される。野尻では風雨が激しくなり、びしょ濡れになって三留野に辿り着く。この地の小学校で衣服を乾かすが、三留野神社についての記述が書き込まれている。再び移動するが、妻籠の義仲出城の跡の歴史や吉田兼好の逸話が記される。中津川に到着してその土地の状況、歴史が書かれる。このように延々と見聞きしたこと、もしくは学習したことがこまごまと綴られて行く形でこの旅行記は構成されている。兵式訓練は一切行われていないし、初期にはよく見られた温泉の鉱泉水の検査のような自然科学的な研究活動もない。歴史地理的内容のみの見聞記録が満載されているのである。1日10里の行程であっても徒歩旅行がまだまだ中心であった当時の旅行としては取り立てて驚くほどの行程ではなかったと考えていい。

明治33（1900）年には修学旅行に対する意見が『教育時論』に掲載されている³¹。前述の批判（明治22年）と論点が異なるのは、修学旅行への認識が大きく変わってきているのは第一に師範学校に限定されなくなっていることである。この意見が「各種学校に

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

於て、続々修学旅行の挙あるは、吾等の頗る快心とする所なるが、之に関し、往々弊害の相伴ふものあるに至りては、一言せざるを得ず」という文で始まっていることから、修学旅行があたりまえの学校行事として普及しているという前提で議論が始まっている。その上で、「既に修学旅行と云ふ、其趣意たる、地理、歴史、動植物の研究に、裨補するに在るは、固より言を俟たずと雖、某生徒筋肉の運動、及精神の訓養を補助すること、亦其重なる目的の一たるを失はず」と修学旅行の目的に対しての揺れは以前と変わらない。そして「学術研究に裨補せんことは、到底行はれ得べからず」と切り捨て、心身の健康という目的についても「全く汽車に乗り、毫も徒歩することなくんば、家中に在ると一般、身神上何の得る所もなかるべく、而して到着地に於て、徒に暴食するが為め、或は却て身体を傷ふに至るべし」と否定的になっている。加えて、浪費、不規律などの団体旅行の楽しさにとまなう弊害をあげつらうことで修学旅行のあり方について警鐘を発している。かつての批判と基本的に異なるのは修学旅行というものに対する批判ではなく、修学旅行そのものは認めた上で、そのあり方と問題点の指摘になっているのである。

修学旅行はその目的が学術研究と心身の鍛錬という二つの目的の間を揺れながら全国の各種の学校に普及していった。当然のことながら師範学校以外の学校に広まることで目的もますます曖昧なものになっていった。この時点での批判はそうした目的の揺れの間に生じた新しい問題を提示している。それは交通機関の発達によるものであったと考えられる。それでも修学旅行は旅行という非日常的営為を共同体験するという強烈な魅力によって、いかに批判されようと、問題点を指摘されようとやめることはできず、とりあえず教育的意義を「取って付けた」形で展開していったと言えよう。

4. おわりに

以上、修学旅行の成立から普及の過程をその目的の揺れに着目して検討してきた。交通機関（殊に鉄道）の発達により修学旅行は急速に物見遊山の要素をふくらませていった。それを促したのは修学旅行の目的の揺れである。この揺れは冒頭で述べたように森有礼と高嶺秀夫の教育観の間の揺れである。結果的に、「本来」の目的を持たない、と言うより「本来」の目的を否定したことから始まった修学旅行は常に自己を正当化する目的を模索しつつ修学旅行そのものを続けるために現在に至っているのではないだろうか。

ところで少し後になるが、三重県師範学校では歴史地理科に限定した実験録を明治39

年に作成している³²。以前から作成していたのかどうかは確認できていないが、修学旅行の目的として教科教育の目的を標榜した印刷物なので紹介しておきたい。同校ではこの年10日間の予定で京都奈良地方に修学旅行を予定することとしており、ルートは津～奈良～多武峰～吉野～高野～和歌山～大阪・京都～大津～津というものであり、吉野以外はほぼ鉄道を利用して移動できるようになっていた。まさしくこの間に鉄道の発達は修学旅行を支えるようになっていた。『実験録』ではこの修学旅行をして「専ら歴史地理ニ関係スル、実地研究ヲ試ミントス」³³と2教科の学習に資するものとして修学旅行を位置づけている。そして「抑、該地方ハ、我ガ歴史ト最深キ、関係ヲ有スル場所ニシテ、研究資料ニ富ムコト、盖シ此地方ニ優ルモノナカラン、此故ニ我ガ歴史ヲ学フモノ、誰カ、一タビ、此ノ地方ノ漫遊ヲ、欲セザルモノアラシヤ」³⁴と記し、歴史の舞台であった京都、奈良地方の「漫遊」するのが今回の修学旅行の趣旨だとしている。

換言すれば、歴史、地理で学んだことの確認・検証のための旅行だというのである。そういうことなので、この内容は神社仏閣を中心とした「旅行地史蹟」についての解説で占められ、後半部分は罫線入りのメモ欄と白紙の頁になっていて、生徒が記録をつけるための配慮がなされている。旅行地史蹟の解説というのは基本的に名所旧跡案内であり、記事中に『太平記』等からの引用はあるが、歴史や地理の教科書との関連はみられない。歴史地理科の教育上の必要から修学旅行を企画したというのではなく、修学旅行のために教科学習上の意義を取って付けた感がみえる。それはおそらく現在の修学旅行にも引き継がれているのではないだろうか。

[注]

1. 東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』昭和6年
2. 文部省が高等師範学校に始まる学術研究を趣旨とした旅行を容認したに過ぎないものだが、浜野兼一「埼玉県師範学校の修学旅行に関する一考察——明治十七年から二十六年までの史的变化を中心——」（『地方教育史研究』第28号 2007年）ではそれを「法的規程」と説明している。
3. 佐藤秀夫・寺崎昌男編『日本の教育課題 5 学校行事を見直す』東京法令出版 2000年
4. 例えば商業学校では修学旅行は行商のような形で実施されたり、商業事情の視察な

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

どが行われたりしている。これらは旅行という形式がそれぞれの学校の教育目的の中で再定義されたものとみることができる。

5. 水原克敏『近代日本教員養成史研究 教育者精神主義の確立過程』風間書房 1990年 572-573頁
6. 水原克敏「前掲書」575頁
また、浜野兼一は埼玉県師範学校においてこの東京師範学校の長途遠足と全く同じ時期に「最初の宿泊を伴った遠足」が実施されていることに注目している（浜野兼一「前掲書」）。この埼玉師範学校の「遠足」については本稿の付録としてその記録を紹介しておく。
7. 「行軍の傍学述上の探窮に及ぶ」『教育時論』第31号（明治19年2月25日）
8. 高嶺秀夫先生記念事業会『高嶺秀夫先生伝』（培風館 1921年）によれば「山川氏は事業家にあらずして精神家なり、校長としての事業は森文部大臣の計画を遵行し、教頭たる先生の輔佐に頼りしに過ぎず」と記され、軍事的な教育を施行しようという森文政の象徴的役割を担っていたと考えられる。
9. 同上 96頁
10. 同上
11. ほぼ同じ時期に埼玉県師範学校においても宿泊での行軍旅行を行っている。その理由として学ぶべき学問の量に比して体力が追いつかないので文部省は「特ニ体育ヲ盛ンシテ学生ノ体力ヲ増進スルノ外他ニ良策アラサル可シ是我文部省ガ曩ニ体操科ノ設ケアルニモ拘ハラズ更ニ兵式操練ノ一科ヲ以テ学科ニ編セラレタル所以ニシテ」（平澤金之助「獣獵紀行」）という指示を出し、これを受けて企画された旅行だという。この旅行に参加した生徒の紀行文「獣獵紀行」を別添史料として掲載しておく。
12. 「生徒行軍の景況」『教育時論』第50号（明治19年9月5日）
13. 「高等師範学校生徒行軍の景況（承前）」『教育時論』第52号（明治19年9月25日）
14. 同上
15. 生徒中、中学師範とあるのは旧来の東京師範学校中学師範科の生徒であり、理科生というのは新設高等師範学校理化学科の生徒である。高等師範学校では明治19年度に理化学科23名、20年に博物学科15名、21年に文学科の最初の新生をそれぞれ迎えている。
16. 注13に同じ

17. 「高等師範学校生徒行軍の景況」『教育時論』第54号（明治19年10月15日）
18. 「修学旅行記の緒言」『教育時論』第62号（明治20年1月5日）に『東京茗溪会雑誌』より文章を転載している。『東京茗溪会雑誌』は未確認。
19. 東京文理科大学・東京高等師範学校「前掲書」32～33頁より採録
20. この最初の修学旅行については新谷恭明「日本最初の修学旅行の記録について——平澤金之助『六州游记の紹介』——」（九州大学大学院教育学研究紀要 第4号 2001年）に詳しい。
21. 「高等師範学校行軍の例規」『教育時論』第99号（明治21年1月15日）
22. 「高等師範学校生徒の房総行軍」『教育時論』第107号（明治21年4月5日）
23. 平澤金之助「明治二十一年中程 会越游紀」『旅行日誌類』（平澤立世氏所蔵史料）
24. 水原「前掲書」572頁
25. 前掲『旅行日誌類』
26. 同上
27. 「社説 修学旅行」『教育時論』第156号（明治22年8月15日）
28. 神奈川県N. S. 「修学旅行ノ非ヲ論ズ」『教育時論』第158号（明治22年9月5日）
29. 『文部省第十七年報 明治二十二年』46頁
30. 『明治二十八年長野県尋常師範学校修学旅行記』
31. 「修学旅行に就きて」『教育時論』第561号（明治33年11月15日）
32. 『歴史地理科 修学旅行用 実験録』奥付はないが緒言の日付は明治39年4月5日とある。緒言に名を列している指導教諭は一谷源八郎、太田藤一郎、平林俊吉であることから三重県師範学校のものであることがわかる。
33. 同上「緒言」
34. 同上

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

【史料】

猷獵紀行 明治十九年二月十九日

緒言 予ハ発スルニ先チテ該行旅中ノ状況ヲ細密ニ記セント欲シ兼テ筆紙ヲモ用意シタルガ何分其勞ニ堪エスシテ終ニ其望ヲ達セザリシマヽ歸校後其記憶スル所ヲ摘撮シテ斯ニ之ヲ記載セルモノナレバ精細ヲ欠クハ素ヨリナレトモ或ハ誤謬ノ存センモ保証シ難カタケレバ看客幸ニ之ヲ諒セヨ

今ノ世ニ体育ノ必用ナルハ今改メテ喋々スヘキニ非レトモ彼ノ三月庭訓公治長ヲ以テ肩ヲ郷党ニ聳ヤカスノ時世トハ雲泥ノ相違モ畜ナラズシテ今ハ単ニ学理ノ精密ナルノミナラズ学問ノ範圍モ亦昔時ニ比スレハ幾十倍ヲ増加セシナル可シ斯クノ如クニシテ学理ハ益々精密ニ赴キ学問ノ範圍ヲ弥々拡張シテ極リナキニモ拘ハラズ之ニ対スル人間ノ脳髓ニハ概ネ限リアルモノニシテ此限リアル脳髓ヲ以テ限リナキノ学問ヲ修ムルニ争デカク之ト對抗シテ克ク其無事安穩ヲ保タンヤ是ニ於テカ千百ノ学生ハ動ヤモスレバ其攻撃ヲ蒙リムリ仮令幸ヒニシテ命ヲ敵鋒ニ隕サズルモ十中ノ七八ハ概ネ負傷者タルモノヽ如シ此ノ如クニシテ能ク其身心ノ健全ヲ保シ能ク其成功ヲ全フスルモノハ寥寥トシテ暁天ノ星ノ如シ豈口惜シコトノ至リナラスヤ之ヲ防クノ方法果シテ如何ス可キヤ是特ニ体育ヲ盛ンニシテ学生ノ体カヲ増進スルノ外他ニ良策アラサル可シ是我文部省ガ曩ニ体操科ノ設ケアルニモ拘ハラズ更ニ兵式操練ノ一科ヲ以テ学科ニ編セラレタル所以ニシテ爾來各府県ノ学校ニテハ盛ンニ之ヲ実施セラレタルガトキニモ我埼玉県師範学校ノ如キハ其規模最完美シタルノミナラズ節々ハ又遠足運動ヲモ行ヒ生徒カ活潑ナル体カト勇壯ナル志操トヲ鼓舞センコトヲ試ミラレタルコトモ亦数回ナリシカ實ニ本年二月十六日ヨリ爾後都合四日間ニ於テ盛ンニ施行セラレタル生徒猷獵運動ノ如キハ其最モ盛ナルコト未タ曾テ其例ヲ見サル所ニシテ全校百数十名ノ生徒ハ何レモ洋服ヲ着用シテ頭ニハ範字ノ徽号ヲ附シタル最ト見事ナル帽子ヲ冠ムリ足ニハ脚半トトヲ穿チテ結束都テ甲斐々々シク正々堂々ノ陣伍ヲ排シ美々シキ旗旌ヲ翻ヒシテ天地ヲ動カスノ喊声ト共ニ一齊獵地ニ押シ寄せタル様ハ目覚マシクモ又勇マシキ事共ニシテ沿道各地ノ人民ハ皆為メニ膽ヲ奪ハレ只管ヲ驚嘆ノ外ナカリケリ元來此猷獵運動ハ昨年末ノ計画ナリシモ彼此ノ都合ニヨリテ本年二月ニ延引セラレタル程ノコトナレバ準備モ皆夙トニ整頓シ殊ニ事務員飯塚宗久君ノ如キハ兩三日ヨリ出發シテ獵丁人夫等ノ具ヘヲナシ休憩宿泊ノ場所サヘモ用

意シ置カレタル程ノ事ニテ之ト同シク生徒等モ一兩日以前ヨリ脚半草履ランドセル（方今流行ノ品ニテ墓口様ノモノニテ之ニ緒ヲ附ケ肩ニ懸ケテ携帯シ至極便利ナルモノナリ）抔夫々用意ニ着手シケルガ遽ハカニ多量ノ需要ナレバ為メニ市価ヲ騰貴セシノミカ供給サヘモ覚束ナキ有様ニテ不都合ノ分モ少ナカラザリシ由スクテ十四五ノ兩日モ過キテ愈々発足ノ期日トナリケルニ恰モ善シ此頃八方サニ昇級試験後ナレバ各生徒ハ皆鮮心シテ胸ニ寸毫ノ衝タワルモノナク只サヘ最トモ心地良キ場合ナルニ今ゾ発足ノ期日ト云ヒ殊ニ天気サヘ麗ワシケレバ一同皆雀躍シテ夢モ定カニ結ボレズ未明ノ頃ヨリ起キ上リテ各用意ニ取り掛リケルニゾ寄宿舎数十ノ玻璃窓ハ寮中無数ノ燈光ヲ漏ラシ明煌々トシテ周ネク四辺ヲ輝ヤカセリスクテ用意モ全ク整頓シテ一同時ノ来ルヲ望ンデ今ヤ遅シト俟チ居リシガ東天次第二曙ヲ呈シ時辰儀モ早ヤ五時ヲ報シケレバ号鐘一タヒ轟クト齊シク一同皆庭前ニ群集セリスクテ教官ハ各生徒ヲ四分隊ニ分チ大凡三十人内外トナシ学科ノ等差ニ依リテ階級ヲ定メ一分隊ニハ江崎昌三、二分隊ニハ竹田左膳三分隊ニハ土方勝一四分隊ニハ中川重時ノ諸君各之カ指揮官タリ横五尺縦三尺ノ大旗ニハ朱ニテ大ナル範字ヲ徽ルシ玉繫キニテ之ヲ圍ミタルモノニテ分隊毎々一旗ヲ建テ連ネリスクケル間々教員諸君モ皆来会シ学務課須藤周三郎君モ亦来場セラレケレバ六時前トモ覚ボシキ頃進メノ号令下ルト トシク喊声一斉天地ヲ動カシ師範学校ヲ後トニシテ行々市民ノ夢ヲ踏破シ正々堂々ノ陣伍ヲ排シテ停車場ヘト押シ寄セタル様ハ鬼神モ欺ク計リニテ目覚マシカリケル事共ナリ暫ラクアリテ一同ハ皆列車ニ乗り込ミ汽笛一声耳ヲ衝クト等シク又モヤ大ニ喊声ヲ発シテ烟ヲ残シ馳セ行キタルカ各停車場ニ於テ列車ノ発停スル毎々彼此呼喚交々起リ沿道諸民ハ何事ヤラント訝カリ合ヘルモノ多カリシナランスクテ長遠十数里ノ道モ瞬ク隙々通過シテ其間大里幡羅及北足立榛沢ノ四郡ヲ経深谷駅ニ達シタル頃八日モ猶九時ニ過ギザリシナルヘシ已ニシテ一同ハ此ニテ列車ヲ下リタル二数十人ノ獵丁等ハ各兎罟鳥銃等ノ獲物ママヲ携サヘ停車場前ニ排列シ道ヲ夾ンデ迎居一同更ニ一層ノ勇氣ヲ添ヘ是ヨリ該駅ヲ通過シアルマデハ喊声暫ラクモ止マザリシガ其途次一興トモ称スヘキハ該駅路ノ中央ニ於テ小休憩ヲ行ナヘタル一事ニテアリキ元来我県内ニテハ從來娼妓ヲ営業トスルコトヲ禁セラレタルカ独リ此深谷駅ニ限リテ特別ノ允許アリシカ為メ全戸数ハ一千ニ過キサルヘケレド該営業ヲナスモノハ母慮数十戸ノ多キニ及ヒ樓閣宏壯ト謂フニハ非レトモ娼妓ノ数ハ之ニ比シテ頗ル多キ由ナリ又家屋ノ体裁ハ他ノ繁忙ナル地方ノ貸座敷ニ比スレバ一般ニ粗畧ナルカ如シ從來予カ聞見スル所ニ抛レバ東京及東京近傍ノ地方ニ於テハ近時万国交通ノ日々ニ煩多ニ赴クカ故ニ各地通行ノ異邦人ヲシテ面ノアタリ此醜体ヲ見セシムルハ国家ノ一耻辱トモ為ルヘク且内国人ニ対シテモ余マリ体裁宜キコト

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

ニアラサレハ其筋ヨリモ布達アリタル由ニテ夫々店頭二墻塙等ヲ建テ廻ハシテ聊カ其外観ヲ繕口ヘタルカ該地ノ同業者ノ如キハ更ニ是等ノ注意ナキノミカ其増築ノ模様毫モ尋常ノ家屋ニ異ナルコトナケレバ紅顔婀娜タル無数ノ遊女ハ各身ニ綺羅ヲ纏フテ格子細ソ目ニ打チ開キ緑リノ髪ニハ花々シキ簪ヲ装ソヒ眉ハ半月ノ如ク眼ハ芙蓉ニ似テ落花羞月モ畜ナラザル最ト麗ルハシキ容態ニ色香ヲ添ヘル顔ハセヲ数多戸外ニ差出シテ隊伍ノ方ヲ打チ見遣リ日本ト紅ラメ莞爾リト笑含メル口本トヲ袖ニテ掩ヘ隠シタル溢ボルノ計リノ愛敬ハ雨ニ濡レタル海棠カ露ヲ含メル牡丹ノ如クサシモ勇壮活潑ナル師範生徒ノ剛腸モ為メニ溶解シタリケン歩ユミ徐ツカニ見エケルガ早くモ酌ミ知ル教官ハ彼ノ嬋娟タル遊女等ガ左右ニ居並ラブ其ガ中ニ暫時休憩ヲ命ゼシカバ流石無情ノ我レサヘモ識ラヌ異郷ノ他人ナレバ憚カル所ナキ道理ナレトモ而カモ心木石ニアランバ何トナウ異様ノ情緒ヲ発シテ極マリ悪ルサノ限りナク一時ハ居リモ堪エヌ様ナリケレバ笑ニ紛ラス其中ニモ顔ヲ見合ス一同ハ如何ナル感情ヲ惹起セシカバ予モ幾ント量知スルニ由ナカリキ斯クテ一同ハ該所ヲ発シテ全ク駅路ヲ行キ過キケレバ之ヨリ左折シテ西南ニ向カヘ更ニ上野台、宿根、柏合、櫻合、人見、針ヶ谷、武蔵野、桜沢、用土等ノ数村ヲ経テ寄居宿ニ至ルマテハ行程凡ソ三里余ナルガ其間ハ皆蔚乎タル樹林ニシテ殆ンド人家ノアラザレバ行々彼処此処ヲ獵渉シテ針ヶ谷村ニ至リシ頃ハ日モ早ヤ正午ニ近カリシカバ同村ノ弘光寺トナン呼ハル寺院ニ於テ一先ツ休憩ヲ催ホシタルカ兼テ通知ヤアリタリケン該村小学校教員数名ハ一応我校長ニ謁見シテ種々談話ヲ為シタル末土瓶茶器ヲ携提シテ我々一同ノ間ニ奔走シテ親シク喫飯ノ給仕ヲ取ラレタルハ最ト奇特ナル事共ニテ一同其懇切ヲ感シ合ヘリ已ニシテ喫飯全ク了リシカハ再ヒ該寺ヲ出発シケルカ折リシモ密雲天ニ塞カリ身ヲモ刺スヘキ寒風ニ雪サヘ交ヘ来リシカバ一同ハ皆雀躍シテ斯クテハ今回ノ企ニモ猶一層ノ機会ヲ与フヘケレハ獲物モ定メシ多カランナド喜ビ合ヘルハ偽リニテ其實路次ノ艱難杯ト竊カニ案シ煩ラヘル者多カリシナル可シ然ルニ其後程ナクシテ幸ヒ雪モ静マリシカ歩行為メニ早キヲ加ヘテ間モナク桜沢村ニ到着シ該村小学校ニ於テ復タビ休息ヲ行ヒケルニ該校員ママ数名ヨリ茶菓ノ饗応サヘアリテ厚キ待遇ヲ蒙ムタルハ深く謝スヘキコトナリ抑モ此桜沢村ト云ヒルハ榛沢郡ノ西隅ニアリテ寄居宿ト相距ルコト僅カニ半里計リニシテ地勢西ニ岡陵ヲ負ヒテ直チニ那珂郡ノ猪俣村ニ連ナリ東南西ノ三面ハ概ネ皆平坦ニシテ用土村及小前田村ニ接ス用土村ニハ今尚藤田康邦ノ城址ヲ存スト云フ小学校ハ同村ノ中央ニアリテ前ハ一帶平野ニ面シ後口ハ峨々タル岡嶺ヲ負ヒリ校舍ハ間口率ネ十四五間奥行約ネ八九間ニシテ中ヲ八室ニ区分スレトモ現在教場ニ使用スルモノハ六室ナルヤニ見受ケタリ勿論内部ノ組織ノ如キハ詳知スルヲ得サリシカトモ外部ヨリ目撃セル所ニ

抛レハ随分完美セルモノ、如シ閑話休題是ヨリ先キ一同針ヶ谷村ヲ出発シテ行々此地ニ
 来ルノ途次漸次西方ニ進ムニ従カヘ粉黛玲瓏タル山嶺ノ近ク目前ニ秀峙スルヲ見テ何レ
 モ勇壯活潑ナル志気ト快潤ナル思想ヲ鼓舞セラレタルガ特ニ予八名ニシアフ関東八州ノ
 平野タル武蔵野ノ北隅ニ生レタレバ天気快晴ノ時ニ於テ稀レニ富嶽ヲ遠望スルノ外八曾
 テ丘陵ダニ目撃セザリシカバ今回ノアタリ峻嶺ノ近ク秀峙スルヲ望ミ殊ニ未見ノ異郷ナ
 レバ見ル所聞ク所一トシテ新奇ナラザルハ無ク彼此ヲ眺メ此処ヲ顧リミ転タ、其景色ノ
 勝レルヲ愛シテ我身体ノ疲労サヘモ絶ヘテ感セヌ程ナリシガ今此桜沢校ニ着スルニ及ン
 テ暫時休息ノ其間ニ近クハ巍々タル山嶺ノ頭上ニ聳ユルヲ仰キ遠クハ西隅榛沢ノ諸山雲
 霞ノ間ニ出没シテ言ハン方ナキ景色ヲ見テ坐ゾロニ之ヲ賞嘆シツ、心志モ失セナシ計カ
 リナリケリ斯克テ此日モ早ヤ三時ニ近ケレトモ前途モ已ニ程ナケレバ先ヅ一獵ヲ試ミン
 モノヲト件ノ学校ヲ辞シ去リテ獵夫ノ指揮スル所ニ任カセ各分隊各其向フ所ヲ定メ合図
 ノ一声ヲ聞クト齊シク近ク後山ニ押シ寄セテ呼声天地ヲ動カシツ、四面ヨリ攀チ登リタ
 ル様ハ其二男マシサノ言ハン方ナリ山谷為メニ震ヒ狐狸為メニ潜伏シテ开モ其昔シ楠
 氏カ金剛山ニ引籠リシキ敵ノ四面ヨリ縁ヲ登リタル様モスクヤアニト想ハレタリ時シ
 モ二月ノ中バナレバ枯木ヲ弥縫スル松柏ノ外ハ絶テ緑葉ノアラザレバ密樹ノ相纏結シテ
 前後ヲ遮断スルノ患モナケレバ行歩モ安カラント思ヒノ外葛藤縦横左右ニ纏トヘ荆棘行
 路ヲ擁塞シテ参差タル枝柳面ヲ払ラヘ契リモ深キ情人ノ離別ヲ惜ム夫レナラデ茅蘆雜木
 裾ニ交ワリ時ニ顛墜ヲ懼レテ触ル、樹木ニ縋ラントセバ忌ム可シ荆棘手ニ針シ彼此ニ墜
 チ散ル栗殻ノ足ヲ振ハシムルサヘアリテ震懼股栗全身汗ヲ滴ラセリ加フルニ身体益々疲
 勞ヲ加ヘ氣息喘々困苦一方ナラザリシカ臆テ一同攀ジ終ツテ將サニ頂上ニ達セント覺ボ
 シキトキ遽カニ周障ママ狼狽シテ叱咤ノ声囂ビスシカリシカ稍々アツテ一頭ノ大ナル野
 兔突クカ如クニ馳セ来リ近ク予ヲ掠メテ走り去リシカ間モナク山ノ西方ニ当リテ叱咤ノ
 声再タビ囂ヒスシケルニゾ馳セ到ツテ之ヲ見レバ之ナン先キニ予ヲ掠メタル野兔ノ正シ
 ク捕獲セラレタルモノニテ快シサノ言ハン方ナク一同互ニ喜コビ合ヘリ偕テ予八前ニモ
 述ヘタルカ如ク平野ノ間ニ生長シテ嘗テ獸獵ノ有様ナンド耳ニダモ聞カサル所ナレバ今
 此山ヲ獵スルニ先チ獵夫ガ我々一同ヲ指示シテ山麓ヨリ之ヲ驅ラシムルハ稍々其当ヲ失
 ヘルニ似タルト独り自カラ訝カリ居タルガ推想都テ反対セリ之ヲ聞ク野兔狡猾ノ類ハ一
 般ニ前足短カク後足割リニ長クシテ山上ニ馳セ上ルコトハ極メテ敏捷ナリト雖トモ下ル
 コト最モ拙ナルモノナレバ毎ネニ上方ニ向ツテ馳セ行ク故偕コソ網ヲ山上ニ張ツテ下方
 ヨリ駆逐スルモノナリトゾ已ニシテ一同皆山頂ニ集リケルニゾ此ニテ暫ク休息セリ抑モ
 此山ハ御手長トナン呼ヒテ而カモ榛沢郡ニ於テ秩父山脈ノ終ル所ニシテ甚タ高キニ非レ

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

トモ東南八直チ二曠野ニ接シテ遠ク荒川ノ流レニ臨ミ西北八更ニ高峻ナル山嶺ニ連ナリ眺望ノ佳絶ナルコト中々筆紙ノ彷彿スヘキニ非ス

土人遠近ノ山嶺ヲ望ミ予等ニ指シ示シテ曰ク彼レハ里蔵山ナリ彼レハ高根山（一名内根山）ナリ又此山ノ西方ニ方ツテ突兀トシテ樹木ナク巍然羣峰ニ秀ツルモノハ即チ鐘撞堂山ナリ山ノ南方十数町ヲ距テ、玲瓏明媚彩霞ノ間隠見スルモノ即チ釜伏嶺ナリ又東方荒川ノ所ヲ隔テ、男衾郡ノ西北端ニ所謂鉢形ノ城墟アリト又北方ノ一村ヲ指シテ彼レハ那珂郡猪俣村ニテ其昔シ源頼朝ノ家臣猪俣小兵六ノ居リシ所ニシテ今尚其城墟ヲ存セリト更ニ東北ノ諸方ヲ指サシ彼レハ熊ヶ谷駅ナリ彼レハ深谷駅ナリ彼レハ本所ナリ小前田ナリナド近傍数里ノ地悉ク羅列シテ目下ニ萃マリ其景色ノ奇且快ナル之ヲ曩ニ桜沢ニ望ミシ時ニ比スレハ霄壤ノ差モ畜ナラサルナリ已ニシテ一同ハ再タヒ此山ヲ降りテ更ニ其近傍ナル里蔵山等ノ数所ヲ獵センガ日モ早ヤ五時ニ近ケレハ此日ハ斯ニ其局ヲ結ビ寄居宿ニ至テ投宿セリ開モ此寄居宿ト云ヒルハ榛沢郡ノ最西隅ニアリテ三面皆岡嶺ヲ繞ラシ只東方ノ一面ハ纔カニ平坦ナル曠野ニ接セリ戸数八大凡ソ一万余ニシテ薪炭ヲ販売スルノ家頗ル多シ此宿ハ熊ヶ谷駅ヨリ秩父ニ至ルノ要衝ニシテ其昔シ男衾郡ノ所轄タリシト云フ警察署ハ市街ノ中央ニアリテ結構稍々美麗ナリ小学校ハ市街ノ後ニアリテ之ヲ桜沢校ニ比スレバ殆ンド見ル蔭モナキ有様ナリ人氣ハ一般ニ質朴ニシテ其風俗ハ之ヲ東京近地ニ比スレハ一般ニ艶ヤビカナラサルカ如シ已ニシテ其日モ暮レ明クレハ二月十七日ニシテ此日ハ前日ノ曇天ニ引替ヘ早朝ヨリ快晴ナリケレバ六時前ヨリ起キ上カリテ一同市街ニ整列シ数声ノ祝砲ヲ発スルト齊シク正々堂々トシテ陣伍ヲ乱サス市街ヲ下ルコト数丁ニシテ之ヨリ左折シテ進行シ直チニ獵地ニ赴ケルガ此日最モ盛ンナリシハ高根山ノ獸獵ニシテ其勢力ノ勇マシサト云ヘ其仕組ノ完備セル等獵夫等モ一同感嘆セシトゾ此日余ハ一同ト共ニ名ニアウ藤田北条両氏ノ香花院タル藤田村ノ正龍寺ニ休憩セル後寺前ナル象ノ鼻ノ勝ハ嘗テ聞キ及ヘル所ナルヲ以テ直チニ其所ニ到リテ暫シ其勝ヲ賞スル間ニ遷引大ニ時ヲ費ヤシ再ビ正龍寺ニ歸リシトキハ一同已ニ出發ノ後ナリケレバ同行北埼玉郡ノ人増田和七君ト共モ直チニ後ニ攀登シテ追及セント企テタルモ已ニ其蹤跡ヲ失ナヒ声ヲ知ル辺ニ慕ヘ行キシカ終ニ路次々踏ミ迷ヒテ只サヘ身体疲労シテ行歩極難ノ際ナルニ蔓藤前ヲ遮キリ荆棘後ヲ蔽ヒテ寸歩モ意ノ如クナル能ハス加フル腹中空虚ヲ訴タヘ氣息喘々汗又背ニ滲タリ進退維レズニ谷アル誰カアル予ヲ平路ニ導キ此困難ヲ助クルモノゾ鬱乎タル山中呼ヘトモ声ナク号叫援ヲ求ムレトモ更ニ応答スルモノナシ而シテ衆勢叱咤ノ声ハ昭々トシテ悉ク手ニアリ之ヲ求ムレハ山途迂曲加フルニ山峰四面ニ秀デ、音響八方ニ反射スルニゾ響源或ハ東ニ聞コヒ或ハ西南北ノ諸方ニ聞エテ絶テ之ヲ求ムル

二由ナシスニ於テカ彼ノ所謂ル「声はすれども姿は見へずほんにお前は屁の様だ」ナル都々逸の始メテ予ヲ欺カザルヲ知ル已ニシテ余ハ増田君ト共ニ胃毛ノ如キ荊棘ヲ右往左往シ踏開シテ漸ク山頂ニ達スルヲ得タリシガ今ヨリ其困苦ヲ追想スレバ慄然トシテ皮膚粟粒ヲ生スルヲ覺ユ偕テ予ガ前ニ記シタル所ノ象ヶ鼻ト称スルハ近傍屈指ノ勝地ニシテ荒川屈折ノ衝ニ当リテ嵯峨タル崖巖突出シ翠松其上ニ峙立シテ下無限ノ淵ニ臨ム河水極メテ清冷ニシテ奔流矢ノ如ク訇然トシテ声ヲ作シ来テ此衝ニ触ルモノハ岩ヲ噬ミ石ヲ食ヒ漸テ静ヲ淵トナリ灑灑澄鮮水色藍ノ如ク之ニ石ヲ投スレバ轟然トシテ声ヲ発シ凄然トシテ久シク留マル可カラズ折シモ河水乾涸シテ兩岸ノ白砂雪ノ如ク一帯ノ碧紗其中間ヲ貫ヌキ水浅フシテ渉ルヘシ河幅八大凡ソ百余間ニシテ対岸ニハ都幾釜伏ノ諸嶺峨然トシテ相對峙シ其景色ノ佳絶ナル事予殆ント名状ニ苦ムナリ原来象ヶ鼻命名ノ起原ハ奇巖恠石水中ニ曲出シテ其状象鼻ニ類セルヲ以テ斯克コソ唱ヒ来レル由ナルガ今ハ其象鼻端崩壊シテ其形態ヲ損シタルハ実ニ惜ムヘキコト共ナリキ已ニシテ一同ハ此日獸獵ヲ終ルノ後彼ノ榛沢ノ最高峯タル鐘撞堂山ニ攀登シテ周ネク近傍数里ノ地ヲ近ク目下ニ睥睨シ次テ四辺ノ嶺ヲ普ク跋涉シタリシカ之ゾ獸獵運動ノ局ニシテ此夕ヘ復タ寄居宿ニ宿セリ斯クテ其日モ暮レ明クレハ二月十八日ニテ此日モ天気快晴ナレバ味爽該地ヲ出發シテ一同直チニ帰路ニ就キ松山町ニテ中食ヲ喫シ次テ川越町ニ着シタル頃八日モ早ヤ已ニ五時ヲ過キケレバ此日ハ此ニ投宿セリ此日經歷スル所ハ男衾、比企、入間及榛沢ヲ并セテ四郡ニシテ其間小前田、武蔵野、荒川、(以上榛沢ニ属ス) 赤浜、今市、鷹巣、西古里、(以上男衾ニ属ス) 高見、能増、伊勢根、奈良梨、越畑、上横田、中爪、松山、志賀、広野、太郎丸、菅谷、上唐子、下唐子、石橋、下青鳥、松山、上野本、柏寄、下野本、下押垂、古凍、今泉、戸守、中山、上伊草、伊草、下伊草、(以上比企ニ属ス) 福田、網代、志垂、宿粒、向小久保等一町一宿概ネ卅八村ニシテ行程都テ十一里村中人家稍周密シテ幾ント一市街ヲ為セルモノハ小前田、管ママ谷、伊草等ノ数所ナリキ偕テ川越ニ至ルノ後其狀況ヲ目撃スレハ流石ニ本県東京トモ称セラレタル程ノ都会ナレハ之ヲ従前經歷スル処ニ比スレハ其繁華云ハソ方ナク豪商大家簞ヲ并ヘテ櫛齒鱗比シタル様ハ左ナカラ東都ニ異ナルコトナク演劇寄席等ノ興行モ数多アリテ外面ヨリ目撃スル所ニテハ中々繁盛ナルカ如キモ翻テ其内部ヲ尋ヌルトキハ矢張り近来不景氣ニ圧倒セラレテ人氣モ何トナウ引キ立タス従テ酒樓ニ荒ムノ蕩郎モ大ニ其数ヲ減シタリト見エ万戸ニ余マル都会ノ中ニ一時数多カリシ芸妓サヘモ現今纔カ二十一人ニ過キズト推テ其他ヲ知ル可キナリ斯クテ其日モ暮レケルカ明クレハ二月十九日ニシテ此日朝来密雲天ニ塞カリ天気何トナク穩カナラサレバ行路モ心安カラサリシカ次第ニ雲モ晴レ渡ツテ間モナク一天拭フカ如

師範学校における修学旅行の成立・普及過程について

クニゾナリキ借テモ此日ハ一同前日ノ疲労モアレバ歩行モ定メテ困難ニシテ抄取ルマジト思ヒノ外浦和ノ坊端ニ達シタル頃八日モ猶正午ニ達セサリケリ是ヨリ暫時休息ノ末復タビ隊伍ヲ整列シテ学務課員教官及分隊長等ノ力先登トナリ此行獲ル所ノ野兎狸貉ノ類百数十頭ノ鳥獸ヲ困擁シテ喊声間ヘモ断ツテナク除カニ市中ヲ進行シテ直チニ歸校シケル様ハ去ナカラ戰場ニ赴キタル兵士ガ数万ノ敵ヲ伐チ尽シテ目出度凱旋シタル時ノ如ク老幼男女ノ群衆シテ看ルモノ市街ニ填咽シタルハ去ナカラ庶民相慶シテ凱旋ノ兵士ヲ迎フルモノニ似タリ此日經歷スル所ハ小仙波、伊佐沼、古谷上、古谷本郷（以上入間ニ属ス）西遊馬、二ツ宮、佐知川、水判土、下内野、並木、上小村田、中小村田、与野、下落合、中里等、凡ソ一町十五ヶ村ニシテ入間北足立ノ両郡ニ跨リ其行程凡ソ六里曩キニ出發シタリシ日ヨリ斯ニ至テ前後四日經歷スル所七郡ニ跨カリ行程都テ三十里ニ及ヘリ又此行獲ル所ハ野兎六十頭、狸、貉、笹熊、鼯鼠ノ類各数頭、其他雉、鳩、山鳥等大小ノ鳥類百数十羽ニ及ヘリ是ヨリ校長綿引君ハ行旅中眼病ヲ発セシカハ已ムヲ得ス先ズ歸校シテ一同恙ナク歸校スルノ日ヲ俟チ居ラレタルコトナリシカ今此生徒一同ガ勇壯活潑ナル有様ヲ見テ喜悅一方ナラサリシカ此夜一同ヲ講堂ニ会シテ獲ル所ノ鳥獸ヲ屠リ之ヲ下物トシテ宴会ヲ開カレ学務課数名及教官諸君モ悉ク皆来場シテ交々演説杯催フサレシカ生徒ノ中ヨリモ亦数名起テ演説ヲ行ナハ夫ヨリ酒ヲ飲ミ肴ヲ食ヒ興正サニ酣ナル頃ホヒ一同或ハ歌ヒ或ハ舞ヒ或ハ笑ヒ或ハ談シテ一時ハ満堂沸クカ如クナリキ斯クテ午後八時頃ニ至テ漸ク退散シタリケルカ実ニ中々ノ盛会ニシテ学務課始メ教官生徒モ一同満足ヲ表セラレタルハ實ニ快樂中ノ快樂ト云フ可キナリ又此日校長ハ獲ル所ノ野獸数頭ヲ県令及大書記官ニ献シ猶翌二十日ニハ眼病医療ノ為メトテ東京ニ赴カルヲ以テ其序イデ文部大臣ニモ又数頭ヲ献シラレタル由ナルガ何レモ皆ナ満足ニ思召レシナラン

行旅中予カ聞見スル所ヘ略ホ右ニ記載スル如クナレトモ歸校後同僚諸君ノ彙聞ニ抛レハ随分各局部ノ事ニ関シテ面白キコトモ多カリシカ中ニモ笑フヘキ事共ハ沿道諸民ノ我々ヲ兵隊ト誤マリ認メタルコトナリ勿論一目スルトキハ衣服容貌都テ兵士ノ如クナルモ熟々觀察ヲ下ストキハ帽ニハ範字ノ徽号モアリ殊ニ銃剣ヲ帯ヒサリシノミカ脚絆草履サヘモ穿ヲ居レバ大ニ兵士トハ異ナレトモ是等ノ点ニハ少シモ注意スルコトナシ尤モ中ニテ少シク注意ノ密ナルモノハ尋常ノ兵士ニ比スレバ顔色容貌麗ルハシクシテ何ントナウ男振りノ勝レル杯言ヒ合ヘルモノアリシ由ナルトモ概シテ之ヲ兵隊視セシニヨリ場合ニヨリテハ厚遇ヲ失フノ不幸モアレトモ権カヲ振フニハ最モ好都合ヲ得タルカ如ク行旅中モ誰憚カラス通行ノ人ニ戯ルハ杯大ニ旅ノ憂サヲ慰サムルノ一助トモ為リシコトナルガ就中
最モ笑フヘキハ同僚ノ某氏余マリノ疲労ヲ医センカ為メ沿道ノ民家ニ入リテ暫時休憩ヲ

井上 美香子・新谷 恭明

乞ヒタル後互ニ四方八方ノ話シヲシケル中ニ一老母アリテ其子ノ先年兵卒ニ徴セラレタルコトヲ語り出テシカ今同僚某氏ノ疲労ニ苦シメル様ヲ見テ我子ノ慈愛ニ引カサレケン坐ゾロニ哀憐ノ情ヲ起シケルカ折シモ旧曆一月十五日ナレハ老母ハ強テ某氏ヲ引止メ蕎麦ヲ薦メナドシテ厚ク之ヲ遇スルノ未猶深く離別ヲ惜メルノ様ハ氣ノ毒ニモ可笑カシケル事共ナリ 畢

小生儀帰校ノ後早速其状況ヲ記載シテ御遞送申可キ心得之處身体疲憊シテ筆ヲ取ルニ堪エズ為メニ一兩日ヲ空過シテ夫レヨリ直チニ該稿ヲ草スルニ着手シケルカ其間種々ノ私用モアリテ終ニ今日マデモ迂引シ其後絶テ御通信ヲ欠キタルハ何共申訳ナキ次第ナレトモ情状御酌量ノ上ニ平ニ御宥恕賜リ度又生儀ハ兼テ旧友某氏ト該紀行ヲ送ランコトヲ約シタレバ別ニ扣ヒ居キ度心得ナレトモ斯クテハ猶モ時日ヲ費シ不音ノ罪ヲ乘スルノ次第ナレバ直チニ御遞送申上候間必ズ手拭キ枕紙等残酷ノ御処置無之様奉願上候
二十七日幸便ヲ以テ御遞送被下候品御書面之通り正々領掌仕候且又仰セ越サレ候試験ノ儀モ滞リ無ク相済ミ候上去ル十五日証書受領候間御放慮被下度候 昇級試験点表左ノ如シ

英学

習字 書取 文典 読方 経済 地文